第８章　アイヌ民族の宗教意識と文化伝承の課題

櫻井　義秀
北海道大学大学院文学研究科教授

はじめに

「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」の報告書（2009年７月）には、「先住民族の権利に関する国際連合宣言（2007年９月13日採択）」の精神と「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議（2008年６月６日衆議院・参議院）」の方針をふまえて、今後のアイヌ政策として、①民族差別をなくし、多文化共生社会を日本に実現するべく国民の理解を求めること、②アイヌ民族文化の振興により先住民族の文化を保護することが述べられている。

①のためには、アイヌ民族の歴史・文化を学校教育において適切に子どもたちに伝え、自治体においてもアイヌ民族に対する不適切な言動がないように広報や社会教育を実施していくことが求められる。②に関しては、アイヌ民族自身が民族文化の学習・伝承の機会を求めたいという声に応じて必要な施設の整備、啓発的な講座を実施し、有形・無形の文化財を調査して保全・保護・育成する施策がとられるべきであろう。

このような具体的な施策をなすにあたって、アイヌ民族において伝統文化がどのように伝承され、維持されているのかを把握した上で適切な課題を設定することが何よりも重要である。しかも、アイヌ民族文化は伝統文化に留め置かれるものではなく、アイヌ民族自身が現代社会に適合的な文化の創出を行っていることにも留意が必要である。

本調査では、アイヌ民族文化の核となる宗教意識と文化伝統の２点から、民族文化の現況を報告する。

第１節　アイヌ民族の宗教意識

宗教というのは、伝統宗教であれ、新宗教であれ、教団に所属して定例的な宗教行事に参加したり、特定の信仰告白を行ったりすることにのみ限定されるものではない。人生観や社会観の基礎となる世界観（現世と来世、人間界と神々の世界等）や、そうした世界観に基づく社会関係のつくりかたも広い意味での宗教の領域に含めて考えられる。伝統社会では人間が宗教文化の中に産み落とされるために、特段宗教を意識せずとも宗教的行為を行うことができるが、現代では宗教を自分の意志で選択するという意識が強まっている。文化伝承のあるところ宗教的文化も後の世代に継承されているのであるが、そのような継承も含めて自由に意志決定できるのが現代社会である。アイヌ民族の伝統的な世界観・宗教文化もまた、現代のアイヌ民族によって選択的に継承され、新しく作り替えられていくのであろう。

さて、このように宗教を大きく捉えたところで、もっとも宗教として意識されやすい宗教組織への所属状況をみることからアイヌ民族の宗教意識について述べていこう。教団への所属状況は、日本社会、北海道社会の一般的な特徴と変わるわけではない。

表８－１　信仰（あるいは教団所属）の概要（複数回答）

	アイヌ固有の信仰	仏教	神道	キリスト教	新宗教	キリスト教系新宗教	その他の宗教	信仰なし	無回答	データ数
実　数	166	2,632	138	29	79	9	48	1,969	771	5,703
比　率	2.9	46.2	2.4	0.5	1.4	0.2	0.8	34.5	13.5	100.0

家の宗教（宗旨）として仏教を上げた人が最も多く、次いで、特定の信仰を持たない人達であり、これだけで全体の８割を占める（表８－１）。無回答が13．5％であるから、個人的な信仰を持っている人はわずか６％前後ということになる。そのうち、教団所属ではなく、アイヌ固有の信仰（そういう項目を立てた効果も考えられるが）と答えた人々が2.9％であり、およそ３％余りの人々が教団所属の特定宗教を信仰している。表８－３のキリスト教と表８－４の新宗教・その他がそれに該当する。

このような信仰者の割合は日本人の宗教意識に合致している。すなわち、特定の信仰・特定の教団に所属する人は少ないが、多くの人々は宗教文化にちなんだ行事を宗教とは意識せずに遂行しているということである。

仏教、キリスト教、新宗教の内訳は表８－２～４の通りである。仏教宗派において、日蓮正宗への所属割合が極めて高い。浄土真宗を凌ぐという点は注目されてよい。北海道において布教の歴史が古い浄土真宗は、北陸諸県からの移住者にも支えられ、道内ではもっとも教勢が強い宗派である。これに対して、日蓮正宗は日蓮宗の中でも多数派とは言い難く、道内における教勢の伸張は、創価学会の教勢拡大と軌を一にしていたはずである。現在、創価学会と日蓮正宗は袂を分かっているために、日蓮正宗と答えた人が学会員であるのか、学会を辞めて日蓮正宗に移動した人々であるのかは不明である。宗旨無記入の人は、少なくとも檀那寺との関係はあまりないだろうし、自覚的な信仰ではない可能性がある。

キリスト教会に所属している人々は教派を明確にしなかった人が多いので、カトリックが多いのかプロテスタントが多いのかは不明である。

新宗教に関していえば、創価学会が日本最大の新宗教である以上、他の教団を凌ぐのは当然であるが、立正佼成会や真如苑といった大規模・中規模教団に比べても信者数は多い。やはり、日蓮正宗との関係で創価学会の教勢を理解した方がよいだろう。

アイヌ固有の信仰と答えた人達の世界観・宗教観は個別に話を聞きたいところだが、次の項において少し詳しく考察したい。

表８－２　仏教の宗派内訳　　単位：人、％

	浄土宗	浄土真宗			法華宗	日蓮宗	日蓮正宗	天台宗
			本願寺派	大谷派				
実　数	29	73	3	6	42	47	132	3
構成比	1.1	2.8	0.1	0.2	1.6	1.8	5.0	0.1

	曹洞宗	禅宗	真言宗	その他の宗派	宗旨無記入	合計
実　数	44	79	38	9	2,136	2,632
構成比	1.7	3.0	1.4	0.3	81.2	100.0

表８－３　キリスト教の教派内訳　　単位：人、％

	カトリック	プロテスタント	その他のキリスト教	宗派無記入	合計
実　数	1	3	1	24	29
構成比	3.4	10.3	3.4	82.8	100.0

表８－４　新宗教・その他の宗教内訳　　単位：人、％

	創価学会	崇教真光	霊波の光	立正佼成会	真如苑	モルモン教	エホバの証人	その他の宗教
実　数	66	2	3	1	6	1	8	4
構成比	48.5	1.5	2.2	0.7	4.4	0.7	5.9	2.9

	無記入	合計
実　数	45	136
構成比	33.1	100.0

第２節　アイヌ民族の伝統的文化と宗教儀礼

アイヌ民族の宗教的世界観とは、諸霊や神々があの世から人間界のこの世にやってきて人間達と交流するというものである。クマ送り、フクロウ送りなどでは、カムイと称される神々を供応し、神の世界に送り返す。この発想はモノに対してもみられ、人間界で役立った品物が壊れて廃棄される場合に、丁寧に送り返すという。

あの世とこの世が一人の人間を中心として過去－現在－未来とつながっているわけではなく、神々の世界と人間界という対応において認識され、人間界では神への祈り（カムイノミ）によって神々と交信する。神々が人間の祈りをきいてくれれば、人間は神々を称え、贈り物をし、祈りをきいてくれなければ贈り物をしないという。極めて力動的で互酬的な関係である。

祭事において、先祖の祭（シンヌラッパ）はことのほか重要であり、あの世において神々と同様の暮らしを行う祖先に対して祈りを献げて、子孫への加護を願う。アイヌ民族の宗教観の核にあるのは、神々の世界に対する働きかけである。アイヌ民族は、神々との互酬的な関係性を共同体的な倫理規範の基盤として生活していたとされる。

現在、このような宗教観や諸儀礼の実施はどうなっているのだろうか。現在実施しているというのは、カムイノミやシンヌラッパでも10％に満たない。送りの儀礼となると動物にしても器物にしても稀である。聖地における拝み、まじないや霊をおろす等の行為は伝聞として知っている人でも十数％である。アイヌ民族の伝統的な宗教観・宗教儀礼に関してまとめると、実践の度合いは相当に低く、過去の出来事としての認知も低い。

先住民族であるからといって伝統的民族文化・宗教文化をそのままの形で保持しているわけではない。伝統的な日本人・日本民族の文化といったところで、どの時代・どの地域の文化を伝統とするのかという問題があろうし、そもそも数十年前の宗教文化的な慣行すら廃れているのが実情である。北海道開拓の歴史の中で同化を強要され、近現代の社会変動を共に経験しているアイヌ民族が、日本社会に生活する多くの人々同様に伝統文化を記憶として保持していたとしても自然なことと思われる。

表８－５　アイヌ民族の宗教儀礼実践　　単位：人、％

		現在も実践している	過去に体験したことがある	人の話やうわさ等で知っている	知らない	無回答	合計
クマ送り	実　数	63	425	1,834	2,345	1,036	5,703
	構成比	1.1	7.5	32.2	41.1	18.2	100.0
クマ以外の動物送り	実　数	38	193	1,071	3,242	1,159	5,703
	構成比	0.7	3.4	18.8	56.8	20.3	100.0
サケを迎える儀式	実　数	269	426	1,708	2,264	1,036	5,703
	構成比	4.7	7.5	29.9	39.7	18.2	100.0
伝統的な婚礼・葬儀	実　数	76	302	1,155	3,018	1,152	5,703
	構成比	1.3	5.3	20.3	52.9	20.2	100.0
伝統的な地鎮祭・新築祝い	実　数	119	357	976	3,086	1,165	5,703
	構成比	2.1	6.3	17.1	54.1	20.4	100.0
伝統的な先祖供養	実　数	530	612	1,034	2,487	1,040	5,703
	構成比	9.3	10.7	18.1	43.6	18.2	100.0
イナウを捧げる	実　数	424	541	985	2,677	1,076	5,703
	構成比	7.4	9.5	17.3	46.9	18.9	100.0
神々への祈り	実　数	432	496	1,270	2,450	1,055	5,703
	構成比	7.6	8.7	22.3	43.0	18.5	100.0
神聖な場所への祈り	実　数	282	332	1,070	2,885	1,134	5,703
	構成比	4.9	5.8	18.8	50.6	19.9	100.0
海・川・山でのタブーや約束事	実　数	190	185	923	3,261	1,144	5,703
	構成比	3.3	3.2	16.2	57.2	20.1	100.0
器物送り	実　数	96	156	749	3,507	1,195	5,703
	構成比	1.7	2.7	13.1	61.5	21.0	100.0
まじない	実　数	48	179	794	3,502	1,180	5,703
	構成比	0.8	3.1	13.9	61.4	20.7	100.0
占いや霊をおろす人にみてもらう	実　数	35	245	730	3,483	1,210	5,703
	構成比	0.6	4.3	12.8	61.1	21.2	100.0
夢見を大事にする	実　数	322	215	825	3,190	1,151	5,703
	構成比	5.6	3.8	14.5	55.9	20.2	100.0

外形的な文化伝承にのみとらわれることなく、文化のエスプリの継承や現代的なアイヌ文化の創造にも目を向けるべきだろう。この報告ではエスプリの問題のみ、次節で論じておこう。

第３節　アイヌ民族らしさ（アイヌプリ）

もちろん、人それぞれの答え方があろうと思う。今回の調査において、この設問を入れて自由に回答してもらったが、含蓄のある答えが多かった。それらを読みながら、エスプリとしてのアイヌプリが生きているという気がした。

最も多い回答が、アイヌ民族の伝統文化・生活慣習等を覚えていること、実際にやることであった。その次に、アイヌ民族としての特性、すなわち自然との共生をあげる人達が多かった。より、具体的には次のような回答になろう。

「アイヌ語をしっかり覚え、昔、フチのふところの中で聞いていたウポポを忘れずいる事。エカシが山で取ってきた動物達の保存方法を活用し冬に食する事。きのこは、サラニップに入れて山に取りに行く事。（ビニール袋では菌が落ちない為）私は、刺繍が出来ないけれど、せめて、子供、孫の為、作る技術を持ってゆく事。最後に、自然に対して、全てにおいて感謝する心を忘れず、また

その事を子供達に伝えてゆく事」

「アイヌプリとは、私の祖母達→先祖が生きるために行なって来た（実践）行ない。アイヌ民族が行なって来た独自の祭事とか、まじないとか、夢うらない等。小さい時（子供の時）聞いた話では、先祖供養の時、何回忌をアイヌプリで行なった…等と良く耳に致しました」

また、アイヌ民族として生きることを家族、近隣、社会関係の中で捉える回答もあった。外形的なものではなく、人への心というものである。

「先祖が行なったようにはできなくとも、生活の中で、人に対する思いや、食べること感動すること、アイヌの歴史を知ること、アイヌがどのように大変だったのか、まずそのようなことを一人一人が色々な方法で調べることで、アイヌの血が流れている自分を愛しく感じるようになって少しづつアイヌ文化が大切に思うようになると思います」

「人を大切にし、物をあげあったり、皆親せきのようにする事、年寄りにはやさしくする、何か（アイヌ語等）知っているから、アイヌではない。アイヌプリとは、アイヌの精神、やさしさや神々への感謝等、日々の生活に感謝する事である」

そして、このような精神があれば、外形的な生活様式が変わったとしても、それはアイヌ民族らしさなのだという指摘もある。

「過去の生活に戻るのではなく、現在の生活環境の中で、食べ物に対する考え方、無駄に捨てない、最後まで使い尽す、物を大切にする。自然や動物、植物に対しては、敬謙（ママ）な心を持つこと。祖先を大切にする事。近隣の人たちにも寛容の心を持つこと。など全てである。これ以上環境破壊をしてもらいたくない。鳥や動物が住める自然を残してもらいたい。アイヌの口承文芸がもっと広まって多くの人がその内容が分るようになれば良いと思う。これらが普通にあり、人々があたり前のこととして、受け入れるならばすなわちこれがアイヌプリなのだ…と考えます」

「◎自然とともに生きる。◎感謝の気持ちを持ち。◎創意工夫して暮らす。◎人々は支え合いの気持ちを大切にする。など漠然としているが、精神文化をあらわすのだと考えます。生活形態が変化する中でも、言語を中心に伝えて行くことは大切ですが、表面だけのアイヌプリではいけないものと思います」

冗長な解説を加える必要もないだろう。アイヌプリとはエスプリである。

しかしながら、文化には形や型、物質的な存在が必要であることもまた一面の真理である。言語や儀礼の実践、慣習的な行為を通して、人はエスプリを学ぶわけである。そのように考えると、伝統的な生業（農耕・漁撈・交易等）のうえに培われてきた自然との共生という精神は、北海道の自然豊かな地方で生活している人であっても現実の生活からは少しずつ失われかねないものである。

ましてや、都市生活者・勤め人であれば、日常生活において自然との関わりは少なくなる。冠婚葬祭にアイヌ民族固有の儀礼を行わなくなれば、神々との関わりを一つの祈りの型として学習する機会も失われる。

そこで、アイヌ文化の伝承活動や学習が必要になってくるのである。

第４節　アイヌ文化の伝承・復興活動への参加

アイヌプリの外形的な文化を伝えているフチやエカシから、アイヌ語や口承文芸、楽器製作・演奏、刺繍・織物、伝統的な食物採集法や漁法、猟、及びアイヌの伝統食を直接に学ぶ機会を得ているアイヌの人々は少ない。地域の生活館における文化活動やアイヌ文化の保存・普及に努める財団や民間団体が主催する学習会、イベント等において、文化の形を学び、会得するのである。

表８－６　アイヌ文化の伝承活動・復興活動への参加　　単位：人、％

		現在関わっている	かつて関わったことがある	関わったことがない	無回答	合計
アイヌ語	実　数	307	724	3,618	1,054	5,703
	構成比	5.4	12.7	63.4	18.5	100.0
口承文芸（ユカラ、ウェペケレ等）	実　数	181	365	4,020	1,137	5,703
	構成比	3.2	6.4	70.5	19.9	100.0
歌（ウポポ、座り唄等）	実　数	361	550	3,698	1,094	5,703
	構成比	6.3	9.6	64.8	19.2	100.0
楽器（ムックリ、トンコリ等）	実　数	339	686	3,585	1,093	5,703
	構成比	5.9	12.0	62.9	19.2	100.0
踊り	実　数	431	727	3,484	1,061	5,703
	構成比	7.6	12.7	61.1	18.6	100.0
祭事（カムイノミ等）	実　数	546	805	3,322	1,030	5,703
	構成比	9.6	14.1	58.3	18.1	100.0
編み物	実　数	175	403	4,000	1,125	5,703
	構成比	3.1	7.1	70.1	19.7	100.0
刺繍	実　数	288	590	3,743	1,082	5,703
	構成比	5.0	10.3	65.6	19.0	100.0
織物	実　数	141	317	4,112	1,133	5,703
	構成比	2.5	5.6	72.1	19.9	100.0
伝統的狩猟・農法・漁法	実　数	132	308	4,117	1,146	5,703
	構成比	2.3	5.4	72.2	20.1	100.0
調理・保存法	実　数	306	624	3,684	1,089	5,703
	構成比	5.4	10.9	64.6	19.1	100.0
木彫	実　数	170	508	3,916	1,109	5,703
	構成比	3.0	8.9	68.7	19.4	100.0
自然観察会（エコツアー等）	実　数	120	259	4,179	1,145	5,703
	構成比	2.1	4.5	73.3	20.1	100.0

実際に様々なアイヌ文化の伝承活動に参加したことがあるという人はけして多くない。むしろ、大多数の人々はアイヌ文化と直接的に関係した生活を送っているわけではない現実がある。やはり、伝統文化の項目を上記の表のように掲げてみても、アイヌ民族の伝統文化が生業と結びついたものが多く、その時代に必要なものを最も適切なやり方で作り、使っていたのであるから、必要性がなくなったものをあえて日常において伝承する人が少なくなるのも当然といえる。但し、日常生活へ

の味わいとして、アイヌ文化が生かされていることは多くの回答者が自由項目であげているところであり、伝統文化への学びの期待は一定数あることを重視しておきたい。

表８－７　今後、関わりたい伝統文化（複数回答）　単位：人、％

	アイヌ語	口承文芸	歌	楽器	踊り	祭事	編み物	刺繍
実　数	581	212	296	341	312	329	328	478
比　率	10.2	3.7	5.2	6.0	5.5	5.8	5.8	8.4

	織物	伝統的狩猟・農法・漁法	調理・保存法	木彫	自然観察会	無回答	データ数
実　数	355	303	459	430	475	4,161	5,703
比　率	6.2	5.3	8.0	7.5	8.3	73.0	100.0

アイヌ語を学びたいという人が10％ではあるが、一番多い。回答者の年齢は学齢期の青少年ではない人が大半である。そのことを考えれば、中高年、熟年層で言葉への意欲がこれだけあるということに注目すべきだろう。

第５節　文化の学習空間

箱モノのことではない。①学習すべきコンテンツ、ソフトの問題であり、②学習者・教授者との関係の問題、③学習が促進される社会的条件のことである。

①に関しては、かなりの程度整備されているのではないか。アイヌ民族文化に関する研究書、学術報告書、一般書は相当なものである。民族学誌という点においても、世界各地の先住民族との比較において相当な研究の厚みがある。しかしながら、地域学として見た場合、沖縄学のような層の厚さ、県民からの支持の高さの域には達していないことを認めざるをえない。アイヌ民族による自文化の研究・振興は確かに大事なことではあるが、北海道社会において多くの人達を巻き込んでいくことが重要な課題と思われる。その意味で、アイヌ民族文化を学校教育において郷土研究の一環として適切に教える教材開発や研修等にいっそうの力が注がれるべきだろう。

②については、短期的にはアイヌ民族同士が学びを行える場を拡大していくことが重要であり、中長期的にはアイヌ民族とアイヌ民族以外の人々が出会える場、多文化学習を目的とした施設や機関を備えることが望まれる。アイヌ民族といっても、父方母方ともアイヌ民族である人、片方だけがアイヌ民族である人、アイヌ民族の配偶者である人と血縁・系譜関係においても様々である。また、アイヌ民族文化を学べる環境にあった人、それが全くなかった人もいる。このような現状において、血縁や民族文化の継承度合いから、アイヌ文化の真正性（authenticity）を強く捉えない方が、学習者・教授者へのストレスが軽減されるものと考える。

③の問題は、文化振興策だけでは解決できない。アイヌ民族文化を学習したいのはやまやまだが、日常生活や家計を支えるだけで精一杯であるという人達が非常に多い。時間・生活上の余裕がなければ、或いは余裕ができたらという声の多さは、アイヌ民族ならびに北海道の地方で生活する人々の実感だろうと思われる。この問題を根本的に解消するのは文化政策の範囲を超えるので、戦略としては、文化伝承が可能な高齢者と教育段階にある若い世代にターゲットを絞り、文化伝承の担い手づくりを考えるのも手かと思われる。

おわりに

近年のアイヌ政策、民族文化振興策によって、北海道社会においてアイヌ民族であることに誇りを持ち、文化伝承に意欲を持っている人達が増えてきたことは大いに評価されるべきことと思う。自由回答項目において、子ども時代をふり返っていじめ、差別体験を想起し、現在との比較において感慨を述べられる高齢者も多くいた。その感慨も、日本政府に対して差別・同化・土地接収（慣習的利用権の不当な剥奪という意識を持たれておられる方も多い）等に伴う補償を要請したいというものから、アイヌ民族文化の伝承に必要な公用地の利用権を確保したいというもの、あるいは、アイヌ民族／和人という差異性を押し出す文化政策をこえて、地域社会や日本社会においてお互いの文化や価値観を尊重し合う共生への道筋を建設的に模索するべきだという意見まで様々である。

それぞれの立場や考えによって、アイヌ民族文化の振興をどのように進めていくのかに対して意見が異なる。それらを一律にまとめることは調査としては正当なやり方ではないだろう。しかし、調査者の立場で最後に一言付け加えるならば、アイヌ民族文化の振興策に係る国や北海道の予算には格段の配慮を求めたい。2009年末の行政刷新会議が進めた事業仕分けでは文教予算が大いに削減を求められ、北海道においても文化振興の経費について議論が生じている。予算策定と執行において透明性を高め、無駄を省くことは極めて重要であるが、教育や文化政策は短期的な結果や成果を求めてなされるべきものではない。

アイヌ民族文化が先住民の貴重な文化遺産であり、現在のアイヌ民族においては文化的資源でもある。日本社会が政治の場で多文化共生社会の実現にはアイヌ民族文化の振興が不可欠のものと政治判断を下した。アイヌ民族自身が勝ち取り、日本社会が支援を決めたこの歴史的潮流を留めるべきではないとのみ付言して、この項目の報告を終えたい。

（櫻井義秀）